

高校生からのメッセージ

「親切の瞬間、親切の感覚」

鹿児島県本部では、小学生、中学生に加えて高校生を対象にした作文コンクールを開催しています。平成30年度作文コンクール高等学校の部で、「特別賞・鹿児島県連合校長協会賞」に輝いたのは**田中美晴（県立鶴丸高等学校3年）**さん。
何かに乗り上げ自転車から降り出された田中さんは、手のひらが擦りむけ、膝から血が噴き出しました。その場にいた人たちが手助けをしてくれましたが、恥ずかしさと申し訳なさを、一刻も早く立ち去りたい気持ちに。そのとき声をかけてくれた小学生の女の子との出会いから、親切についての思いを作文に綴りました。小中学生の皆さんの心に響く作文を、抜粋してご紹介します。



落ち着きを取り戻し、自転車を押し始めた。
「ありがとうね、本当にもう大丈夫。あなたも気をつけて帰ってね。本当にありがとう。」
「勇気を出して、お姉ちゃんに声をかけてみてよかった。断られたり、ツンとされたりしたらどうしようって怖かったの。でも、お姉ちゃん、親切そうに見えたから。」
親切をしてくれた人に、親切そうに見えると言われるなんて、また涙がこぼれそうになった。あの子が親切を行動に起こすには、きつと、相当の勇気がいったらう。幼い私がそうだったように……。

私はこの出来事を作文に書き留めようと決めていたが、鉛筆は思うように進まない。小さな親切作文コンクールに出会ったのは、小学1年生のとき。友達の入賞作品を読んだとき、私も書いてみたい、と思った。翌年から親切について考えるも、結局一つも書けなかった。
中学・高校に入ると、連休中の課題となり、いよいよ書かなくてはならない状況に追いやられ、今に至る。
覗き込んできた母が、「小学生の頃、ママに頼ってくると『親切というのは、作文を

書くためにあるものでもなく、賞を取るためにするものでもないのよ』と言ったこともあったね。でもね、美晴の書いた作文を読むと、そうだった、そんな気持ちになれたことがあった、って、子どもの頃の純粋で真つ直ぐな思いやりや勇気を思い出すことができたわ。大人になって、日常の中で、体裁を考えたり、理屈や立て前を気にしたりして、親切の瞬間を見逃してしまうことが多くなったな、って、反省させられたよ。」と、肩をもんでくれた。

女の子が私にくれた親切を通して、私も母に似た気持ちになったのは、少し大人になったということなのだろうか。だが、大人になると親切の瞬間を見逃してしまうことが多いのならば、それは、あまりにも残念なことだ。

この作文コンクールは、毎年、親切について考え、それまでの自分の生き方を振り返り、その後の生き方を切り開く道標となった。女の子がそつと寄り添ってくれたとき、感じることに、思い起こすことのできた親切の感覚を絶対に忘れることなく、大人への階段を上っていきこう。これが、私の書き納めとなる。

そして、今、鉛筆を置く。